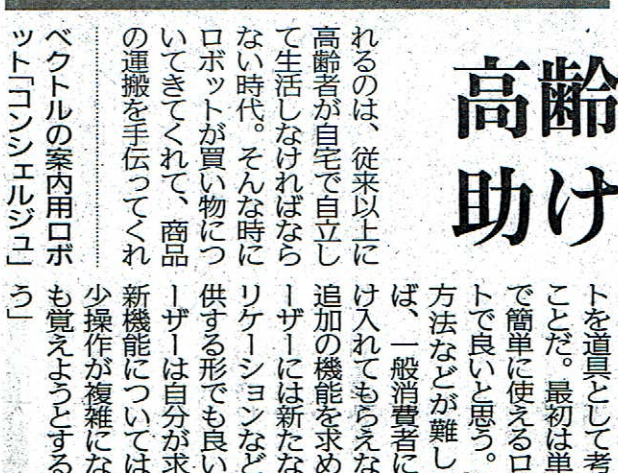
ボットを追求

生活を支える次世代のツールとして期待されるサービスロボット。真に役立つロボットとはどんなものだろうか―。政府が〝世界一のロボット利活用社会〟を目標に掲げる今、あらためて考え直す必要がある。想定されるサービスロボットのユーザーは、製造業のエンジニアでもロボット愛好家でもない一般の消費者だ。求められているのは、科学技術を進展させる高度なロボットではない。〝身近で使いやすいロボット〟。そんな製品を産み出す経営者2人に、事業にかける思いを聞いた。

ベクトル社長（東京都立川市） 小山 久枝 氏

現実的な意見を反映



―消費者目線の〝親しみやすいロボット〟を開発しています。

「専門家だけが集まって開発していると、高度な技術が前面に出た製品になる。ただ、一般消費者は、その技術によって何ができるのかが分からないと買ってはくれない。開発担当には技術マニアになりすぎないよう求めている。高齢の方などにも良さが分かり、簡単に使えるような製品が出ないと、生活の中でロボットは普及しない」

―ロボット専業の企業にはない視点です。

「私自身、技術者でもロボットの専門家でもない。ただ、生活家電をはじめとする機械製品を使うことは頻繁にある。意外と男性より家事を担う女性の方が機械のユーザーになることが多い。今のロボットの開発は、技術者のロマンが追求されがち。女性によるユーザーとしての現実的な意見が、もっと反映されたら良いと思う」

「ロボットがどんな環境でも必ず動くということも重要。家電や自動車の世界では常識だが、ロボットについては当たり前になっていない。これでは消費者は許してくれない」

―ベクトルはデザインを担う会社です。ロボットに関するデザインの重要性とは。

「『このロボットは人に危害を与えません』というメッセージをデザインの力で発信できる。例えば、当社の案内用ロボット『コンシェルジュ』は、対面者への圧迫感を軽減するため、常に幾分前屈みの姿勢に見えるように設計してある。このほか、一般消費者にとってはデザインが購買の大きな動機になることも見逃せない」

―ロボットのどんなところに可能性を感じていますか。

「介護の現場などでは人手不足が深刻。施設に入りたくても受け入れてもらえない高齢者は多い。今後予想されるのは、従来以上に高齢者が自宅で自立して生活しなければならない時代。そんな時にロボットが買い物についてきてくれて、商品の運搬を手伝ってくれたら大きな助けになる。移動や重い物の運搬に伴う負担が軽減されるだけで、高齢者の生活はずいぶん楽になる」

高齢者の自立 助ける道具に

「大事なのはロボットを道具として考えることだ。最初は単機能で簡単に使えるロボットで良いと思う。操作方法などが難しければ、一般消費者には受け入れてもらえない。追加の機能を求めたユーザーには新たなアプリケーションなどを提供する形でも良い。ユーザーは自分が求めた新機能については、多少操作が複雑になっても覚えようとすると思う」

ベクトルの案内用ロボット「コンシェルジュ」

創刊100周年 特別号